

# しらおか歴史物知りシート

No.1-4

こもれびの森・歴史資料展示室

## 【いろいろな形の縄文土器】

旧石器時代と縄文時代とのいくつかある違いの中でも、大きな違いとして挙げられることのひとつに「土器の獲得」があります。

原始時代の時代区分について「土器」を尺度とする考え方があり、旧石器時代のことを「先土器時代」とか「無土器時代」と呼ぶこともあるほどです。

土器を獲得したことで人々の暮らしはどのように変わったのでしょうか？縄文土器の持つ様々な形を視点に彼らの暮らしを見てみましょう。

●**土器が与えた暮らしの変化** 土器はものを入れるための容器ですが、それだけなら蔓を編んだ籠でも動物の皮などで作った袋でもこと足ります。木を削り抜いたボウルのようなものでもよいでしょう（これらはすべて縄文時代に存在します）。これらの容器と土器との違いは、火にかけられるかどうかということです。

そうです。縄文人は、土器を獲得したことで、暖かいスープや煮物を食べることができるようになったのです。灰汁が強かったり硬くて生では食べられないけれど、煮れば食べられるようになる食材を食べられるようになりました。また、鮮度の落ちた肉や魚でも煮て食べることで食中毒のリスクを低減させるなど、衛生面での大きな改善が見られたはずですが、食べられるものが増えることは、絶えず飢餓に怯えていた暮らしを改善し、「縄文文化」の開花へと繋がります。

●**機能が求めた土器の形** 一般的に、コップを大きくしたような形の土器を「深鉢形土器」と呼びます。これが、縄文時代をとおして使われた土器の基本の形です。この深鉢が、中ほどでくびれたり、口が内側に湾曲したり、外側へ反り返ったり、はたまた大きく波打ったりというように変化します。これは、内容物の性質やそれをどのように扱うかなどの、いわば生活の改善のために求められた機能的な形の変化だと見ることができます。

土器の利点である火にかけられるという点を考慮すると、内容物は液体である可能性が高いと見ることができます。もちろん 100% そうだということではありませんが、そのように考えると合点がいくこともあるのです。想像を逞しくして一緒に考えてみましょう。

例えば、胴部に大きなくびれを持つ土器の場合、くびれの内側にすのこ状のものをかければ、蒸し器のように使えたでしょうし、くびれに紐をかければ持ち運びに便利だったでしょう。

注ぎ口の付いた深鉢形土器は煮炊きしたあと、上澄みの煮汁だけを捨てることができました。また縄文時代前期に片口の付けられた深鉢形土器が作られますが、この片口の両脇には半円形の突起が付けられたり、大きな波形の口縁部の谷間に片口が付けられたりします。これは、注ぐ液体に利用価値があって、浮遊性の不純物が一緒に流れ出ないように突起や波形の口縁部の間に遮蔽板を当てるためだったと思われます。



縄文時代の編籠の復元模型（福岡県東名遺跡）  
『縄文の奇跡！東名遺跡』佐賀市教育委員会編



深鉢形土器（入耕地遺跡・縄文後期）



注ぎ口のある土器  
(大古里遺跡・縄文前期・さいたま市) (幸田貝塚・縄文前期・松戸市・重文)



片口付深鉢形土器



急須のような土器  
(当館蔵・縄文後期)

注ぎ口の付いた土器には、今日の急須や土瓶のような大きさのものもあります。これらはとても綺麗に磨かれたり精緻な模様が施されたりしており、普段使いの器ではない可能性を思わせます。こうした土器は、儀式や祭りなどの席で「酒」を入れたものかもしれません。

儀式や祭りといえ、今日の「三方」のような台付のお皿もあります。特に縄文時代の晩期には、こうした「台付鉢」と呼ばれる土器がたくさん出土します。神に供物を供えたり、神聖な品物を載せたりするのに使われたのかもしれない。



台付の皿形土器 (入耕地遺跡・縄文晩期)

●器種の細分化による形の変化 縄文時代は1万年以上続きます。この間、土器の形は全く変わらないわけではなく、徐々に進化していきます。特に縄文後期から晩期にかけては加速度的に変化します。何に使われたのか全く想像できないものも出現します。例えば、吊り手形土器や香炉形土器、手燭形土器などといわれるものが出現するとともに、器の大きさも大小さまざまなものも出現します。

また、土器の機能分化が進み、「粗製土器」と呼ばれる装飾要素が低く器形の斉一性の高い「日用雑器」と、装飾要素が非常に高く精巧に作られた「精製土器」＝「ハレの器」とに分化する傾向が見られます。大きさはさまざまですが前者は比較的大きく、後者は小型である傾向があります。



香炉形土器 (当館蔵・縄文晩期)・浅鉢形土器・(前田遺跡・縄文晩期)・深鉢形土器 (清左衛門遺跡・縄文晩期)

精製土器

粗製土器